

抗がん剤治療と出産を 愛情と栄養で乗り越える。

二人目の子どもの出産と乳がん。二つの大きな試練に直面した30代の女性Kさんは、病気の発覚から1ヶ月後に「産む」決断をします。しかし抗がん剤治療による副作用への不安もあり、予断は許さない状況が続きます。そんな時、力になったのは医療従事者である母親の存在でした。Kさんと子どもは、果たしてどんな運命をたどるのでしょうか？



確定診断から三週間後、Kさんの抗がん剤治療が始まります。Kさんの乳がんは、トリプルネガティブと言って悪性度の高い進行性のがんで、乳がん特有のホルモン受容体がないため、治療は抗がん剤のみに限られます。診療を受けた大学病院でも「症例がない」といわれ、当初から治療は困難が予想されました。

抗がん剤治療には、嘔吐や倦怠感、食欲低下、脱毛など副作用が伴います。ところがいざ始まってみると、Kさんは日を追って元気になっていきまし

た。抗がん剤治療は、7月上旬から9月末までの間に4回行いましたが、副作用に苦しむことなく、順調に治療スケジュールを消化していったのです。なぜでしょうか？ 抗がん剤が効いたこともありませんが、考えられるのは食事を見直し、徹底した栄養療法に取り組んだことです。乳がんがわかっただけで、Kさんに栄養改善を促したのは、医療従事者でもある母親でした。お母さんは、重い決断をした娘の意志を尊重し、健康な赤ちゃんを産むためにも必死でKさんを説得します。

真っ先に相談したのが、親交があったボタニック・ラボラトリーの森山晃嗣先生でした。娘と一緒に森山先生のセミナーに参加し、必要な栄養指導やアドバイスを受けました。徹底した糖質制限に塩分管理、オメガミネラル、ビタミンのサプリメント、ボタラボグリーン、キャロット、ミネラル77を毎日3〜5杯補給し続けました。それまでのKさんは、お世辞にも良いとは言えない食生活を送っていました。夫や子どもの食事は作っていました。Kさん自身はお菓子やアイスや甘いものが大好きで、間食でお腹を満たすなど塩分、糖分の多い食事を続けていたそうです。そんな生活が体に影響しないはずはありません。普段から偏頭痛や足のむくみを覚えたり、体調が優れない日もあったようです。いつしか一人目の子どもの授乳中に「胸にしこりがあるのを感じてずっと不安に思っていた」とも語っています。お母さんと森山先生の指導を受けて、必要な栄養素を徹底



あきやま しんいちろう
秋山 真一郎

医師・医学博士、カナダマギル大学臨床腫瘍学客員教授。NPO法人がんコントロール協会理事。がん免疫治療と植物栄養素を中心とした免疫栄養療法など、副作用のない多角的療法で成果を上げている。

注入したKさんは、抗がん剤治療が始まるころには「偏頭痛やむくみがなくなり、体調がいい」と気づいたそうです。

体は、予想以上のペースで機能しはじめたのでしよう。抗がん剤治療後の検査で、胸のしこりは消えていました。そして10月20日、元気な赤ちゃんを無事、出産するのです。

1ヶ月健診も終わり、医師から「母子ともに健康」と太鼓判を押されたKさんは、改めて正しい食事と栄養の重要性を感じています。治療は今後も続くので気は抜けません。Kさんは母親や支えてくださった人びとの愛情に心から感謝しています。